声楽分野における社会貢献活動（Ⅱ）
Social Contribution Activities in the Field of Vocal Music(Ⅱ)

渡　邉　寛　智
（保育学科）

キーワード：声楽、社会貢献、地域、コンサート

1. はじめに

2020 年 1 月に日本国内で新型コロナウイルス感染症の感染者が認められて以降、空気中に飛沫が飛散する原因とされた歌や楽器による音楽活動の自粛が全国各地で相次いだ。その結果、日常的に行われていた各種コンサートだけでなく、学校教育における音楽の授業で行われる歌や楽器の演奏活動も控えなければならない事態となった。筆者自身もこの数年間は通常通りの音楽活動が行えずに、音楽活動を自粛しなければならない状況が続いた。本稿では、筆者の音楽活動が再開された 2021 年の終わりから 2023 年までの声楽分野における社会貢献活動を項目ごとに分けて報告する。

2. 声楽演奏における社会貢献活動

1）低音の響き～癒しのコンサート～

⑴コンサート開催の経緯と目的

新型コロナウイルス感染症が蔓延する中で、これまで通りの音楽活動を行うことは困難であった。都市部だけでなく地方でも音楽活動が制限され、多くの演奏家が苦境に立たされていた。またクラシック音楽のコンサートが少なくなってしまったことによって、地方の音楽文化が衰退していくことを危惧していた。そこで、音楽文化の支援ができないだろうかと考えていた際に企画したのが「低音の響き～癒しのコンサート～」である。地方における音楽文化と音楽家の支援を行うとともに、クラシック音楽の奥深い魅力を伝えるため、低音の声と楽器によるクラシックコンサートの開催を企画した。コンサートのテーマを「低音の響き」としたのは、普段クラシック音楽では主役になることが少ないメゾソプラノ、バス、ヴィオラ、コントラバスの魅力を伝え、クラシック音楽の奥深さを伝えることを目的としたためである（図 1）。

⑵コンサートのプログラムと開催方法

このコンサートは、2022 年 10 月 23 日に米子市文化ホールのメインホールで開催した。ソリストは、メゾソプラノの田内愛さん、ヴィオラの生原幸太さん、

コントラバスの永瀬未希さん、ピアニストの渡邉芳恵さんに出演いただいた。プログラムの前半に各ソリストの特性を活かした選曲を行い、後半は重奏や重唱などのアンサンブル曲を選曲した。プログラムの詳細は以下の通りである。

【低音の響き　～癒しのコンサート～】
J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲第1番ト長調から前奏曲（ヴィオラ）
G.F.ヘンデル：オンブラ・マイ・フ（バス）
G.ボッテジーニ：エレジー第1番（コントラバス）
F.リスト：ローレライ（メゾソプラノ）
M.ブルッフ：ロマンス 作品85（ヴィオラ）

～休憩15分～

K.D.v.ディッタースドルフ：協奏交響曲より1楽章（ヴィオラ、コントラバス）
R. シューマン：二重唱曲（メゾソプラノ、バス）
秋の歌
宵の明星に
J.ブラームス：二つの歌（メゾソプラノ、ヴィオラ）
静められたあこがれ
聖なる子守唄

アンコール
J.ブラームス：子守唄（出演者全員）

なお、このコンサートを開催した2022年10月は、まだ新型コロナウイルス感染症が「5 類感染症」に引き下げられる前であったので、感染症対策を講じる形で開催した。米子市文化ホールのメインホールの客席数約670席に対して半数の約330席を販売し、間隔を一席ずつ空け、なるべく来場者の接触を避けるようにした。また、通常であれば入り口でスタッフがチケットの半券を貰い受けるが、

図１「低音の響き 癒しのコンサート」（2022）

それではチケットを介しての感染が広がる可能性があったため、来場された方がチケットの半券を切り取って、半券を入れるための箱を用意して回収する方法にした。来場者の方には入口での手指消毒、マスクの着用をお願いした。プログラムの配布も、本来であればスタッフが手渡しで行うのが通例であるが、あらかじめ入り口付近のテーブルにプログラムを並べて、来場者が必要な部数を取れる方法にした。なお、これらの方法はコロナ禍におけるコンサートの開催方法として既に一般的になっていたものである。

出演者は、コンサート当日まで細心の注意を払いながら準備を行うとともに、万が一出演者の一人が体調不良などで参加が難しくなった場合に備えて、予備の演奏曲を用意してもらうなど、緊急時に備えたプログラムも準備した。幸いなことに、コンサート当日は体調不良者もなく、無事にコンサートを開催することができた。

今回のコンサートは、一般的に知られていない楽曲も含まれていたため、進行役をヴィオラの生原さんと筆者で行った。演奏する前に、短い時間で曲の紹介を行うことで、聴衆の方にわかりやすく曲の魅力を伝えられた。来場者アンケートの結果を見ても、「とても楽しかった」「楽しかった」が約 8 割と概ね好評を得ることができた。今回のコンサートの目的は、コロナ禍における音楽文化と音楽家の支援であったので、概ねその目的は達成できたように思う。

なお、このコンサートは 2023 年 12 月 2 日に 2 度目のコンサートを、米子市淀江文化センターさなめホールで開催した。2 度目の開催時は、新型コロナウイルス感染症が「5 類感染症」に引き下げられていたので、感染症対策を行わず通常通りの開催方法で行った。2 度目の出演者は、前回に引き続き、ヴィオラの生原幸太さん、コントラバスの永瀬未希さん、ピアニストの渡邉芳恵さんと筆者に加え、新たにオーボエ奏者の安田美和子さんにイングリッシュホルン（オーボエと同じような形状で、オーボエよりも低い音が出せる楽器）でご出演いただいた。2 度目のコンサートでは、前回開催時よりも親しみのある楽曲を取り入れたプロ

グラムで行ったことで、前回と同様に好評を得る結果となった。

2）三朝ヴァイオリン美術館 渡邉寛智ソロコンサート

2023 年 7 月 15 日に、三朝ヴァイオリン美術館からの依頼があり、同美術館で開催されたソロコンサートに出演した。一人でソロのコンサートを行うのは、新型コロナウイルス感染症が流行する前であったので、実に 5 年ぶりのソロコンサートであった。プログラムは以下の通りである。

【三朝ヴァイオリン美術館 渡邉寛智ソロコンサート】
①G.F.ヘンデル
　オンブラ・マイ・フ
②作詞:R.E.パリアーラ/作曲:F.P.トスティ
　魅惑
③作詞:L.ボヴィオ/作曲:E.デ・クルティス
　泣かないおまえ
④作詞:G.トゥルコ/作曲:L.デンツァ
　フニクリ・フニクラ
⑤ 作詞:土井晩翠/作曲:瀧廉太郎
　荒城の月
⑥ 作詞:若山牧水/作曲:古関裕而
　白鳥の歌
⑦鳥取県民謡
　貝殻節
⑧作詞:北原白秋/作曲:山田耕筰
　鐘が鳴ります
アンコール
　作詞：北見志保子/作曲：平井康三郎
　平城山

プログラムの前半にイタリアの歌、後半に日本歌曲を歌った。前半はヘンデルの「オンブラ・マイ・フ」から始まり、「フニクリ・フニクラ」へと親しみやすい曲目を選曲した。後半の日本歌曲は、瀧廉太郎の「荒城の月」、山田耕筰の「鐘が鳴ります」などの定番曲に加え、「栄冠は君に輝く」の作曲者として知られている古関裕而の「白鳥の歌」や鳥取県民謡の「貝殻節」を選曲した。子どもから大人まで楽しめる内容のプログラムであったため、来場者の方に好評を博したコンサートであった。

3）地域のコンサート

新型コロナウイルス感染症が流行してから演奏活動そのものができない状態であったが、徐々に感染症対策を講じながら演奏ができる場面が戻り始めた。コロナ禍前と比較すると、各種演奏会や、アマチュアの演奏家、および団体などが活動を再開できないこともあり、地方の深刻な音楽文化の衰退を感じていた。そこで、地方の音楽文化が衰退しないために、地域のコンサートなどでも積極的に出演している。鳥取県琴浦町東伯で活動している高齢者のコーラス団体が行う定期演奏会のゲストとして出演したり、同県大山町中山で定期的に行われている公民館のコンサートのゲスト出演など、今後も音楽による文化支援活動を継続的に行う予定である。

3. 地域の演奏会の企画や構成における社会貢献活動

1）少年少女合唱団によるお伽歌劇《ドンブラコ》の部分的再演

2021 年 12 月 19 日に行われた、山陰少年少女合唱団リトルフェニックスの定期演奏会におけるメインステージにおいて、現在研究を行なっている「明治・大正期の子どものための音楽劇」のひとつである北村季晴が創作したお伽歌劇《ドンブラコ》の演奏を、同合唱団の協力を得て部分的な再演を行うことに成功した(図 2)。

再演箇所は、「第一場　爺婆住家の場」から「第二場　出征途上の場」の冒頭部分である。「第一場　爺婆住家の場」から「第二場　出征途上の場」の冒頭部分は、昔話「桃太郎」の物語では、お婆さんが川に洗濯に行く場面から、桃太郎が鬼退治に出かけた先で犬、猿、雉に出会うまでの場面である。北村の創意工夫によって生み出された作品は、現代の子どもたちにとっても歌いやすく、親しみやすい作品であることがわかった。また北村は、演奏者のレベル、人数、構成など、どのような条件であっても演じられるような汎用性の高い作品に仕上げていることが明らかになった。

幼少期の活動のなかでオペレッタ・ミュージカルなどの音楽劇は頻繁に行われているが、日本国内におけるこのような活動がいつ頃から始められたのかについてはあまり知られていない。明治以降、先人たちが西洋音楽を受容しながら、どのような経緯で子どものための音楽劇が生まれることになったのかを研究し、それを一般の方に知っていただきたいと思い、山陰少年少女合唱団リトルフェニックスの協力を得て、抜粋版ではあるが来場者の皆様に知っていただくことができた。このように、明治・大正期に活躍した音楽家が子どものために遺した作品を調査することで、過去に行われていた表現活動が、現在行われている活動にどのように関連しているのかを捉えることで、今後の幼少期の音楽表現のあり方を考える一助になるものと考えている。今後も地域の合唱団と協力して、明治・大正

期の子どもの音楽劇の再演を行いたい。

図 2「お伽歌劇《ドンブラコ》の部分的再演」（2021）

2）音楽研究室キッズコンサート

2023 年 7 月 17 日に、島根県立大学短期大学部音楽研究室のゼミ学生が企画・運営を行った「第 1 回キッズコンサート～さがしにいこう！にじいろのメロディー♪～」が開催された（図 3）。

このコンサートは、筆者のゼミに所属している学生が、「卒業研究」の研究テーマと関連する楽曲を選曲して、地域の子ども、保護者の方を無料で招待するコンサートである。第 1 回目は、松江市市民活動センターの交流ホールで行った。

学生たちは、企画の段階から積極的にコンサートの準備に取り組み、就職試験や実習がある中で熱心に練習などを行った。なお、このコンサートは前半に学生たちが発表を行い、後半は音楽研究室を卒業して、現在松江市内で現役保育士、またピアニストとして活躍している卒業生にピアノ演奏を披露していただいた。コンサートの最後では、ピアノ演奏を披露した卒業生が在学中に作曲を行い、現在では保育学科のテーマソングになっている「みんなの詩」を、卒業生の伴奏で在学生が歌い上げた。「キッズコンサート」のプログラムは以下の通りである。

【第 1 回キッズコンサート～さがしにいこう！にじいろのメロディー♪～】
第 1 部　「うたとリズムであそぼう！」
さんぽ
おもちゃのチャチャチャ
すいかのめいさんち
どんないろがすき

にじのむこうに
ジャンボリーミッキー

第 2 部 「特別ゲストはるかお姉さんのピアノコンサート 」
子犬のワルツ(ショパン)
トルコ行進曲(モーツァルト)
革命のエチュード(ショパン)

合同演奏
みんなの詩(うた)

図 3「音楽研究室キッズコンサート」(2023)

3）ムジカバンビーノ～子どものためのクラシックコンサート～

2023 年 9 月 9 日に米子市コンベンションセンター小ホールで、「ムジカバンビーノ～子どものためのクラシックコンサート～」を開催した。このコンサートは、本格的なクラシック音楽をわかりやすくユニークな形で子どもたちに関心を持ってもらうためのコンサートである。

このコンサートでは、前半に「アニメーションとピアノ演奏で、見て聴く！」をテーマとして、ドビュッシーの「子どもの領分」を、関西を中心にアニメ制作を行うグループ、アニメーション・スープが作成したアニメーションと、渡邉芳恵さんのピアノの生演奏で披露した。第 1 曲目「グラドゥス・アド・パルナッスム博士」から、終曲の「ゴリウォーグのケークウォーク」に付けられたアニメ作品を、実際のピアノ演奏でアニメーションを見ながら鑑賞するスタイルにした。全 6 曲からなる約 15 分程度のピアノ曲であるが、ピアノ演奏だけでは子どもたちの集中が途切れることが考えられた。しかし、ピアノ演奏とアニメーションを同時に鑑賞することで、子どもたちは集中を切らすことなく最後まで「子どもの

領分」を楽しんでいた。今回のコンサートでは、アニメーションスープが 2018 年に製作したアニメーションを紹介することができたので、今後もこのような、クラシック音楽作品に映像をつける試みに取り組みたい。

後半では、「ピアノと弦楽器の演奏で、想像して聴く！ 」をテーマに、サン＝サーンスの「動物の謝肉祭」をピアノを岩本理恵さん、渡邉芳恵さん、ヴァイオリンの長原愛美さん、コントラバスの永瀬未希さんに演奏を依頼し、語りを本学保育学科の卒業生である上村菜々子さんにお願いした。前半では聴くことと見ることにテーマを置いたが、後半は逆に聴くことと想像することをテーマにした。現代社会では視覚的な効果が簡単に得られるため、想像する力を育んでほしいという願いを込めて、後半は想像する大切さを伝えながら、サン＝サーンスの「動物の謝肉祭」から「かめ」「すばやいロバ」「ぞう」「カンガルー」「水族館」「かっこう」「白鳥」「フィナーレ（終曲)」を演奏した。お話を交えながら演奏を行ったことで、司会者が言葉巧みに子どもたちを動物の世界へと誘い、こちらも最初から最後まで飽きることなく子どもたちに音楽の魅力を伝えることに成功した（図 4)。プログラムは以下の通りである。

【ムジカバンビーノ～子どものためのクラシックコンサート！～】
第１部「見て聴く！」
クロード・ドビュッシー
「子供の領分」

第１曲　グラドゥス・アド・パルナッスム博士
第２曲　象の子守歌
第３曲　人形へのセレナード
第４曲　雪は踊っている
第５曲　小さな羊飼い
第６曲　ゴリウォーグのケークウォーク

～休憩 15 分～

第２部「想像して聴く！」
カミーユ・サン＝サーンス
「動物の謝肉祭」より

「かめ」
「すばやいロバ」

「ぞう」
「カンガルー」
「水族館」
「かっこう」
「白鳥」
「フィナーレ（終曲）」

図 4「ムジカバンビーノ　～子どものためのクラシックコンサート！～」(2023)

4. 審査員としての活動

演奏者、およびコンサートの企画・運営だけではなく、審査員としても社会貢献活動を行なっている。2022 年 6 月には、出雲フィルハーモニー交響楽団の第 25 回定期演奏会で、オーケストラと共演する若き音楽家のソリストオーディション審査員の一人として、山陰にゆかりのある若手音楽家の審査をさせていただいた。声楽・楽器の分野から優秀な音楽家が参加され、7 名の方が定期演奏会に出演されることになった。

2023 年 12 月には、第 21 回松江プラバ音楽コンクール審査員の声楽部門（中学生・高校生）を務めた。島根県は以前から「声楽王国」と呼ばれており、優秀な声楽家を多く輩出している。その理由が何であるのかを、この審査員を務めたことで理解できたように思う。中学生の演奏は、声楽の基礎を大事にした演奏と選曲がなされており、高校生では中学生の頃に培った基礎を発展させ、音楽大学や芸術大学の学生が歌うような難易度の高い曲をしっかりと歌い上げる生徒が多いことに大変驚いたからである。これは、島根県に優秀な指導者が県内各地におられること、その指導者の方々が間違いのないしっかりとした声楽の基本を指導して、発展させていることを証明するものであった。その指導が世代を超えて受

け継がれ、その結果、島根県では優秀な声楽家を長きにわたって輩出しているのである。筆者にとっては、審査員を務めたことで島根県の声楽の歴史を知るような貴重な機会となった。

5. おわりに

2023 年 5 月 8 日から、新型コロナウィルスは「5 類感染症」に引き下げられたことにより、社会生活のほとんどがコロナ禍以前の状態に戻った。コロナ禍における不自由な生活は多くの音楽に関わる人々の活動を制約するものになり、筆者にとっても音楽活動が制限されることは想像以上に大きな苦しみを伴うものであった。しかし、コロナ禍前のスタイルを継続して行うのではなく、新しい時代に合わせた対応を考えることで、新たな活動を生み出すきっかけになった。その一つが、各種コンサートの企画・運営である。コロナ禍によって地方の音楽文化が衰退するのではないかと一時危機感を持ったが、その危機感が音楽文化と音楽家支援を考えるきっかけになった。そこで企画したのが「低音の響き」のコンサートである。また、音楽活動が停滞することで子どもたちのクラシック音楽離れが懸念される時に考えたのが、子どものためのクラシックコンサート「ムジカバンビーノ」である。これらの活動は、演奏がメインの社会貢献活動を行なっていた筆者の活動の中に新しく芽吹いた活動といえる。今後は、これらの活動に加えて審査、指導などの活動を行い、声楽分野における社会貢献活動を幅広く行いたい。

参考文献

渡邉寛智（2022）「少年少女合唱団によるお伽歌劇《ドンブラコ》の部分的再演 -部分的再演から見えるお伽歌劇《ドンブラコ》の汎用性-」島根県立大学松江キャンパス『人間と文化』第 5 号 pp. 31-40

謝辞

これまでに筆者の社会貢献活動に関わってくださった皆様に心より感謝申し上げます。